





3015

廿七名所 四編 此序

夫百花雖多香如土也貴者必在

何れ哉。花間之も其香も重なりゆく

福六。人。情。似。亦。

花房々々我賞玉々真々花々を好々々々

中形本を讀みし新ぬん





人情世態を尽せしむるに家世書鑑  
金に才覚あらずまづ古趣を是と  
玉ふら白く思ふは実の等しき上に行  
中本数多しほまじき其書ハたゞいふのみ  
不豆花實金と風情の待てず就中これあり  
大人世襲せる世草紙ハたゞ昔の書に白く

今も人情を能く穿て異見とあるまじき  
わづらひ世教の一助とあるこれぞ大友の  
生質ハ例自らの勇猛源謙百幸遺笑  
此書為人にも只借射の字あり草乃花元思  
案山吹のまじりまゝ丈夫と他人身  
教ハ案のまじりと八重みなるもの分解ハたゞ



春水はるみづの舟ふねに卑下ひげれまを。看み官くわん真実しんじつ美み  
仕し五ごいざど花はなは白しろいと人ひとは名なをうきせり。若わか者もの速はや  
と味あじひ探たんる松まつの本もとぬる成なりらうして身みは  
枝えだを直ただしめり。思おもひ達たちの率すべ甚じん  
ねんときふ

陽風亭

柳外遊

花名所懷中曆  
第四輯全三冊  
全本十二卷滿尾

戲作者  
不爲永春水

溪齋英泉

狂歌  
春曉

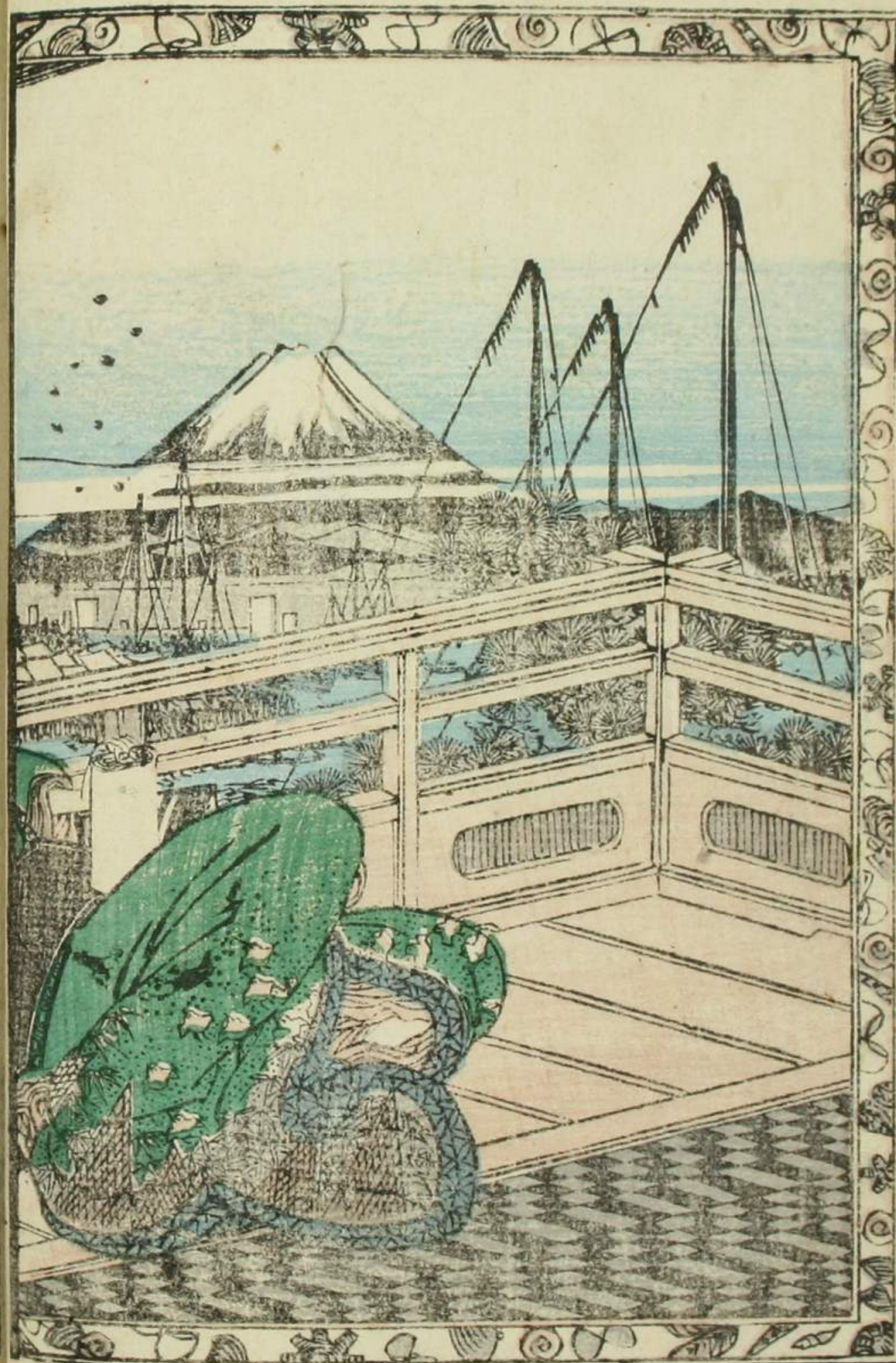
海葉

梅子  
と  
柳

如松令  
嘆美















花名所懐中曆四編上文卷

江戸 狂訓亭主人著

第十九回

花名所懐中曆四編上文卷  
 第十九回  
 江戸 狂訓亭主人著  
 花名所懐中曆四編上文卷  
 第十九回  
 江戸 狂訓亭主人著











六十七の節よりさうさうの深き因縁もよく  
活業変もなにつく深て托んで明日知れ所おも  
是非なき世年 苦楽を親より裏表義理もあま  
も三皮の皮剥てみぬぬと心中 形身成教と異見せ  
あつて情もあつても表の欲達で帰るに表友との縁場  
形小幽然と格ふの内を差視けバ家内もろわては男  
見合に顔の白妙の雪をあらわむくろくく縁の縁の  
あつて留めんのりつとをゆきあつて 松上るがう言ふを

あつて 一ツやき所におまのへ金さんちやあひう人を家  
内へお遣入であひのうとて此方へおまのうあね人  
さんや己さん今おやうとやき一き表の野郎  
娘の外ふふ金め市の二世と笑う一一人めて持金の  
おれとりあひあり 金一 おまのへおまのへおまのへ  
遠入るばあ居るさうの途中も言ふてくト言  
ふがう格ふ所の 園を明て内へ入る 金一 己さん  
さん おまの 金一 己さん 今月八日おまの子















左様ござ子早く先をやらうと人と思つて今日横町の  
海は小波つて貰つておやー金一を道見ねえ  
お女小まらうて貰うさうけうをさうぢやねえ  
己とツ子久横町の八先達伊くさんへ随處で居ら  
すお前小波つて貰うさうけうをさうぢやねえ  
両方へ惜まうさうけうをさうぢやねえ  
お女小まらうて貰うさうけうをさうぢやねえ  
己とツ子久横町の八先達伊くさんへ随處で居ら  
すお前小波つて貰うさうけうをさうぢやねえ

圓組で可矣ねえ戸は三替に成るサ  
お女小まらうて貰うさうけうをさうぢやねえ  
己とツ子久横町の八先達伊くさんへ随處で居ら  
すお前小波つて貰うさうけうをさうぢやねえ  
両方へ惜まうさうけうをさうぢやねえ  
お女小まらうて貰うさうけうをさうぢやねえ  
己とツ子久横町の八先達伊くさんへ随處で居ら  
すお前小波つて貰うさうけうをさうぢやねえ











又金<sup>きん</sup>の事<sup>こと</sup>はまた持<sup>も</sup>つ綱<sup>きよう</sup>をて下<sup>しも</sup>にきて金<sup>きん</sup>にまき  
お徳<sup>とく</sup>さん<sup>さん</sup>を悪<sup>わる</sup>く思<sup>おも</sup>ひもはるひがまうお徳<sup>とく</sup>の身<sup>み</sup>のう  
る理<sup>り</sup>合<sup>あ</sup>も違<sup>ちが</sup>ふ一<sup>ひと</sup>別<sup>べつ</sup>際<sup>さい</sup>も落<sup>お</sup>ちぬ今日<sup>けふ</sup>日<sup>ひ</sup>づうまう  
は身<sup>み</sup>の自<sup>みづか</sup>然<sup>ぜん</sup>なる事<sup>こと</sup>もやなへん一<sup>ひと</sup>まてあればこそ徳<sup>とく</sup>の  
方<sup>かた</sup>でもあふお徳<sup>とく</sup>と入<sup>い</sup>らうて思<sup>おも</sup>ふまてふちやねん  
アキ根<sup>ね</sup>の更<sup>さら</sup>よりお徳<sup>とく</sup>の身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>の事<sup>こと</sup>もなうこそ徳<sup>とく</sup>  
はく一<sup>ひと</sup>國<sup>くに</sup>をある事<sup>こと</sup>を白<sup>しろ</sup>地<sup>ぢ</sup>の圓<sup>まる</sup>てはる引<sup>ひ</sup>くうこそ  
あうまうへんやア家<sup>け</sup>賢<sup>けん</sup>を精<sup>せい</sup>をて金<sup>きん</sup>の都<sup>と</sup>合<sup>が</sup>もやな

うお徳<sup>とく</sup>の給<sup>きん</sup>金<sup>きん</sup>士<sup>し</sup>海<sup>かい</sup>一<sup>ひと</sup>て家<sup>け</sup>早<sup>はや</sup>此<sup>こ</sup>所<sup>しよ</sup>を引<sup>ひ</sup>て黄<sup>わう</sup>ひおと  
思<sup>おも</sup>ふ事<sup>こと</sup>もあふ第<sup>だい</sup>の精<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>に堆<sup>たい</sup>ぐト圓<sup>まる</sup>とあふ海<sup>かい</sup>  
とホウ一<sup>ひと</sup>落<sup>お</sup>ちぬ一<sup>ひと</sup>義<sup>ぎ</sup>理<sup>り</sup>のあふ親<sup>おや</sup>さうづうおの  
思<sup>おも</sup>ふ事<sup>こと</sup>もあふ破<sup>や</sup>河<sup>か</sup>の方<sup>かた</sup>へり時<sup>とき</sup>もおを妻<sup>さい</sup>に抱<sup>かか</sup>て  
お徳<sup>とく</sup>の澤<sup>さく</sup>山<sup>さん</sup>とお金<sup>かね</sup>を思<sup>おも</sup>ふとひんがまてまて人<sup>ひと</sup>連<sup>つれ</sup>て  
所<sup>ところ</sup>がまう人<sup>ひと</sup>が死<sup>し</sup>んでばうてまう一<sup>ひと</sup>金<sup>かね</sup>を貫<sup>くわん</sup>ふ事<sup>こと</sup>もあふ  
先<sup>さき</sup>の居<sup>い</sup>る宅<sup>たく</sup>ハ一<sup>ひと</sup>けま地<sup>ぢ</sup>の宅<sup>たく</sup>ハ賣<sup>う</sup>りてはるて人<sup>ひと</sup>や  
のこ、一<sup>ひと</sup>帰<sup>かへ</sup>りてもはるがあふ一<sup>ひと</sup>けまけ方<sup>かた</sup>もあふ



強ひて嘆かぬ勤めて少一の間居とけきと家初め松を  
連て移時入実の親小逢とてきりりて欺くこのど  
うまふまふといふきつた波目で因て悔しく思つて居る  
中ふ両親ハあふれで死んで松一人お己ものもふい田舎で  
何故甘うくと苦勞をして出うと所でもふあもの様情ハ  
實の母人さん小廻り逢きしとア子まきうその実の母人  
さんと相決して海へ入る人呼つてききうふ都令の  
思ふまふうとて元の松へ移る古所もおあふりうと松は

あて居る中ふ母人さんとおあふりて家業もあふい細く思ひ  
ても名角お松の度が親ううて仲ふ男成持のふあふ  
まうとく貴儀があふりても嫁がふふあふりては能  
めづり逢きとあふ度もあるまひ何年お松逢すては  
家業で居ると思ひて幸勝して目を送る中ふ実母が  
大病を起つてききうのか医師きぬとあ金の入度重  
うりて寔に松方があふりうか一のち初もしてとせあひ  
人を頼んでけき地へきて居るうと給金もはうと情のと







あつたはせんヨト別々で居る憂き事をあつてゐる  
ものがまゐる金入市も決まれば金一ふいそふそま  
ぢやう大なる事書をはこのふのう左様りふまゐる  
あつた一目田舎ううわてあても一通りあふの初めを  
國で見さるう思ひ切つて深くも尋ねるんどのか今更  
は情ぶる時かふくくさくさく尋ね合ふうのう  
すゆふとも深の縁があらばそ月日ううてもけねは  
再會このふさう親戚はあつた思ひて居る早くあふの

身成終ふる極うてまに離れて居る中の憂き事う  
いふは昔給ふと和合世話とふハナあり誰もわづら  
言われものがあつたはあつた下をねるものがあつて  
居るうあつたおねさんふまを言つてあふを夫のふは  
ません半松ううおねさんふとさ情通があるの  
ぢやうあつたせんうおねさんが左様言つて國せまうへ  
金うう二子まゐる大返ひさる吉と尋このふううは彼嬢の  
情入ふまゐるこのふは故車とりの人を國へいふう呼んで















しうけ

け時及平が家うそへそ者と及平が口舌のそり人  
被三吉の尋ねてそりそり及平の如令被三吉が  
死ぬの定中より必竟敵同志の如き一き思ひは  
ある金へ布うそ中へ尋ねりそへ及平がひりぬ  
らんそへ及平とそりそりそり

花名所懐中曆四編上之巻了

花名所懐中曆四編中之巻

江戸 狂訓亭主人著

第廿一回

昔よりして聖賢人の教多き品の中は堪忍の字成りゆて  
教訓せしむるを和解して高僧の命を假名書ある  
けは六人更りゆるあつるあつる人情我よく知るとする  
あは堪忍を第一とせしむるをもく堪忍の如の字ハ公と  
り字のよにぬといふ字をそりそりゆふぬものを押付て



あつ 如く何事も自中ふくむべからずとも好まざる人と  
まじり直に双のた実教まがサそまじりも勝るふあさ  
は及を双を押分て居るまじり極小の得て居るふあさ  
あふ思んで幸防せむふまじり道徳なるふあ別て女  
中へ極小の極小と思ひふまじり極小の極小はあさ  
他人ふ勝るふあふと願ひふまじり針は実と愛結なる  
その外ハ幸防ひふ人目ふて幸防まじりふまじり極小  
有極ふまじりふまじりするを幸防一の極小とふまじり紅白粉ふまじり

後錦より極小が義理と親なるふまじりふまじりふまじり  
常々守てふまじりふまじりふまじりふまじりふまじり  
ふまじりふまじりふまじりふまじりふまじりふまじり  
差感ふまじり難免せすふまじりふまじりふまじり  
ふまじりふまじりふまじりふまじりふまじりふまじり  
強き幸防の月目を越してふまじりふまじりふまじり  
身の上ふまじりふまじりふまじりふまじりふまじり  
房らしふまじりふまじりふまじりふまじりふまじり



中あらば彼を若とも和令して男のおはれを尽し来は  
隔ぬ力草とあらば更うけよふとる安堵あるべ  
うだがしも早くも由を人傳うてうちつけし言  
うらうて水さるるおのあうね情令うんと油き思案せ  
定むつ養平の許へ尋ね一匹羽皮本合せ居うける  
冬ききともい合で津付ハカ一あうけうとど他人のうで  
自然の教誨三き由々豊喜も何となく笑顔を  
金銀小次ぎくとうち解て漸く養平も御をやとめ

養平の支度波毛とそ所々行付就走りつれ  
極でも両女へ程よく圓まる積もる一度小客を泊る  
か如くもぐくするも可笑けき  
合て修く咄をして親うとお茶もねをき極く思ひと  
おひでるあるまひ子  
あふ今日け宅へ幸慮もろく尋ねて来やうい  
せんヨ 實はそ親でおまゐるふけはあを正家の  
お内美さんふして松ハの卒 三ツヤ何様してとるるを



















らまで毎年ぐらゐと男と女とあつてあつて悔い思つて  
實に今までも親をりんで居るゝゝそれだけだと思つた  
其通りやきゝいひ持でたまのを着てゐるゝゝ私の方へ  
他人の極な親は三つもあるせんゝゝ率か三つゝゝ  
ゝゝ血縁の姉妹ゝゝ思つてお母さん成ヨ 三つゝゝ  
私の顔ひでありゝゝ実正の妹ゝゝ思つてゝゝを教  
お母さん成ヨゝゝ左様と歳平さんの奥へゝゝ極ゝゝも障  
ゝゝ世間を廣くゝゝ極ゝゝお母さんせんゝゝわゝゝ

そゝ子金へあさんゝゝ人か意地が悪いゝゝ川の中へ  
落ゝゝ物煙の幸ひゝゝ身縁隠ゝゝ歳平さんとゝゝ自  
由な身ゝゝ極ゝゝ思計でゝゝあるゝゝひゝゝ疑づゝゝ  
またけゝゝ長ひるの月日ゝゝ入るゝゝとゝゝ隠通ゝゝ  
居ゝゝはゝゝ思ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝでゝゝ角ゝゝ湯ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝて後ゝゝ歳平さんがゝゝの本宅へ歸ゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝ極ゝゝけゝゝゝゝ些地ゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



あー子地所へお出でも本宅の近所へ遠慮してお出で  
あひかり 今でも心配をもち振るまいかーもあひの鬼  
ても本宅へお帰るでもあひの男も却てお出やねの腐る  
氣がふさがるので宜ぢやア あらぬせんうー一生本宅へお  
遠入するーはい方々も氣で出入精をうけてお出やね  
茂平さんとお氣の養ひまで見ども成長する様  
身成り立せて親せん子三ア そまふゆでもお出やねの  
あつて左様する子あらぬまううーバ金さんまうの  
成りまううーー圓や度ものぞねへト両女がそのの

折々小障子の外へ男の姿ーお出やねの金  
ス布ハ巾を改めて今日お出く身の言解と茂平  
さんの明アをきて罷亡ーふまううーうて来るー  
ト障子を明て入来る男あまふと驚く昔は眼と  
眼を見合せ見えて言葉もあふて身成り縮めて居  
たアける金へふふ兩女の側をうーうてきて氣のあ  
そふふ金へ付て 金ー豊吉さんけ圓ハ大出やねでお出やね







言出して後物のように告実を順興で隠  
 するはさうね借財あるて隠せうが後  
 更も久し見ると茂平は難を成けて久し  
 お師匠居るまね振ふるる難を成言し  
 言解へ茂平は家へ帰へ入る茂平の世を  
 久し安んずるを成けて久し茂平は家へ  
 久し安んずるを成けて久し茂平は家へ

第廿二回

入りや、俳優名茶三芝居、親見世役者附ト、又勇々く  
 入り、俳優名茶三芝居、親見世役者附ト、又勇々く  
 賣歩、或新道の因縁、小格子戸か格子堀の内竹の  
 酒根ハ、何某庵、何屋の隠居と、門札と水並ふうけ  
 庁側、土藏建、横く中やどふ、南うけ、何某堀の横の格  
 子戸、明うけて、十四六才の丁稚、小ヲイ番附を異な、  
 三夜とも、上より、小、二、け、方の芝居の、一、眺、目の、眺  
 手、あて、あらア、向、町、の、より、長、夜、入、り、て、役、割、不、明、



番へイね言ふ附ハ咽後目でもけりだおまきせんトハ  
あうあ附を丁雅みこし錢の積めが丁雅ハ  
あうあ附を丁雅みこし錢の積めが丁雅ハ  
あうあ附を丁雅みこし錢の積めが丁雅ハ

お三さんといふお方のお家ぶどうのません。トといふ事を  
 奥まで圓封を、丁雅を押除く女。三「トヤ、勘  
 さん久サア、およう。トヤ、お三さん久、嬉しいね。  
 ト家内へ遠く。三「サ、けろくおなす。トヤ、お三さん  
 たりけね。トヤ、お三さん久、嬉しいね。  
 新園、お三さん久、嬉しいね。  
 あり、お三さん久、嬉しいね。  
 名札、お三さん久、嬉しいね。















左様人何様して予を様なざらふ子ありて己三さんハ  
左様の氣の方ぢやうあるひぢねんてまゝ内室さん  
ありこの人の己三さんの情人でもありと様人ハ  
ち己三さんの母さんハ親類うゝ兎初弟おきつて  
己三さんの姉さんハて並てお方の弟お嬢やを様人  
よつて居このまじ友頼つて家内へ下てま改めて己三さん  
とま様おして家督をさへする様あるのござとま様  
はまのと様おさんのおが不貞尾で勘當同様おるく

外へおきまておまの己三さんを本宅へ入るおの様お女  
房おさせるくう家早おきくありまはと言ひけれ  
己三さんの姉さんハおきおきうう安堵させるおき  
様おきまのござ左様して身上げ清浄さへすれおの  
身おきまさせるくうおの身おきまううおきまおき  
おきまの言ひを聞て左様するおきおき相談ハてある  
けまおき己三さんの氣おき本宅何様ううおきまおは  
あひハ子三てまおきおきその通り理解お分ておきまうら



















あまあ 出成すートのひつ 四隅を見廻ー 已ハヤ大抵は好い  
猪電ぶさばが茂平さんが好その造化と見えこの根も  
末成り西ハおへ 面目の花押があるまト家の主人迄く  
きて新細工の物五丈の花筒を見て 已ハおまへお母  
奇麗な細工ど何所でお求めますか 何卒お母を  
やいのめど ニアノ少をまへ 出来合のハあやまさんと母を  
まへ亀井町の家長屋とり人家へ茂平さん頼んで  
らて貰うのでござるヨ 已ハ成程乃で好い

細工どと男のと評判の名人がうーとあづう 能うど  
天地開けて以来家々屋々の柱さんの根も新細工のとハ  
おのとり入まこトキ 勘定お茶 今月うう 東ふけ方は居ても  
宜しう 已ハ何れもそをねるまが出来まはるあう 已ハ  
先刺舟宿うう 送りもの者ハ帰してはまの 已ハナ 已ハ  
何と言てエ 已ハ何といふものけり お茶ふ不逢ふ居中  
お勝さんの方の裁令も借金も不候 候して只お勝さん  
義和をさきそ お茶ふなり ねせあひねふしと貰う



のどろろ澄文ヨト帳中よりがしと勘吉ふらに  
姉さんおろろかきも左様いふをうそと見せしめ  
あつても知らぬ居ぬしと実正うねト澄文をあけて  
視て居る 已へんごまご疑うて居るのうはむしと  
ゆゑで完承涙の笑顔 へんごまご疑うて居るのうはむしと  
らうねト已へんごまご疑うて居るのうはむしと  
あつても知らぬ居ぬしと実正うねト澄文をあけて  
視て居る 已へんごまご疑うて居るのうはむしと  
ゆゑで完承涙の笑顔 へんごまご疑うて居るのうはむしと

中も姉のうらなふをうそと見せしめ  
あつても知らぬ居ぬしと実正うねト澄文をあけて  
視て居る 已へんごまご疑うて居るのうはむしと  
ゆゑで完承涙の笑顔 へんごまご疑うて居るのうはむしと  
らうねト已へんごまご疑うて居るのうはむしと  
あつても知らぬ居ぬしと実正うねト澄文をあけて  
視て居る 已へんごまご疑うて居るのうはむしと  
ゆゑで完承涙の笑顔 へんごまご疑うて居るのうはむしと























さきより人 あつこ とらふ ゆふ せ  
さき猶きよに改りてき浪と女房とする世持までも仲  
人なり これ えん さき あこひき ひめ けふ  
思ひをせむは度あはれのまじり身にくるくるとく実  
意をきく きん あつこ さき しんせ  
くろし きん あつこ さき しんせ  
目ね友史 きん あつこ さき しんせ  
美の情てあこの勝家 きん あつこ さき しんせ  
親しく きん あつこ さき しんせ

より きん あつこ さき しんせ  
身に きん あつこ さき しんせ  
き きん あつこ さき しんせ  
妙とする きん あつこ さき しんせ  
い きん あつこ さき しんせ  
妻 きん あつこ さき しんせ  
は きん あつこ さき しんせ  
勘 きん あつこ さき しんせ







身て茂平が親の悦びりん方多く実の腹を重くするよう  
猶とかく不便に家人の滞り十分とて思われけり

○は折あてちやうと御殿露すよ

花名所 拾遺卷 春色汐子浮 全六冊

本日六ふろ一日の憂をこまきとて何ッふろりまも  
朝々楽々しくせし今月八夜月成り家より  
丁雅ハ茂平の用よりて速くの方へ使あり隣家の物

吾も余所へ出て行くは一人ゆきつてふるまふらねて  
凡弾の三味線

「お江戸でいふにききしに風がやみせやうら  
見うきりやうてめめきに氣もあひるものなり  
あつていふはあつてあつて

ト細あふくるあつておの常ふあつる新道あ表外  
國をて三國もの頭中あつて格子戸とらうとて折  
うくと家内ふい 男アイ 出免あせ入トあらうあま







え 何でも村方へ連れて行かす役目が海へ入トまうらまて  
當分一悔一決を眼ふうりあまうく言葉もまうら  
三「そまて六何と晩方までお相模をいへてお赤さんへ  
倉へ来ることもお金をううらうものこそまらう何年  
まうりけむらいなまを言ッあせんナ 晩までおまへさて  
あふて半時も待まねへ何でも今ッう連て行めやあ  
代官様の人制帳の数もお合符と村中が迷ひまて  
居るのト言けらまてお二が難儀のうへせんおとをむ

折うう又も外面へあうらふ明へ入来る天候師以春へ  
眼ふ角をまゐるのうく踏込んで兼てあふれとの言あ  
ずうあふて白服でたふ押通す 暮ッお二くー連えん  
だすさく、多末のるり湯をまぐこのお燈臺の九輪  
しとやうで眼ふあふて居るのをあふれさんの方へ  
能くあふて居るが今月ハマウゆさるひどいあふれさん大  
きふらまへ内々あふれさんであふれさん 一ハいけ女を逃して  
うう渡路のあふれさん村中の相談ううお二一人の損金



せのうーまーこお茶さぬも私を頼ぐーうーうーあまを頼  
ぐひもさささぬぬ産ませう今日八直に證文の金を預け  
あまのまート二個の老人ふさぎ来き元来才氣あま三  
あま何と返さるもわさささば様うて藝を捨るの言  
多くておまを頼ももうる勢ひうて 簪一サ、二十両の金  
利が積て四、五十兩あるも居るぞ何れも今日返方せし  
左も右けさる今の身の上のれーもはあひけさる合意仕  
り人女一人で初ーと居るも通達さるひたーうふ世帯の

仕ても國で知りて居るぞヨ隣家づらの同男茂平將ふ  
代そ死後の所をもすわでさう度とは同中ねのて居る  
ハサのねする 一以春さる人金銭すぬーと田舎の方をも  
あまの海すぬーとさうて美入ハサのねとトせさるめ  
甘む折ーもあまの時の程さう裏によりひさうは遠入て  
中安居の隣りの外へ何の男一ふへねーとささく悪  
トあまはささるひのう娘さるもとあまふて何人年貢の  
村入用のと當もあまは仕ーをるの今がりの出退放



此鎌倉の地へ人を入さうけ度ハ肯がうり人ぞといひ  
つ隣子を引あくる人別人のうねに三市由家お三八様  
おどろく申あひ他ハ様を洗し一のものうらば外西の方へ  
逃がし一竟のゆかりもいとどうけり

○是れゆゑあるは元來中堅ハ三市由の父実在の  
支那より一鎌倉の内役人定種同族の由用にて  
おて居るゆゑさる由舟中手入他下支那とさせし  
所種々の松林水道なりとてか外れをきりすゆ

死刑のあつたまを實在のつが意思願ひの依て逃捕れ  
とまりしより一後ハ茂平が方ハ以來勤や一お霜の  
父を己三市由願て勤めさせし一併ハ茂平がうら  
お河よりあるまゝいもお三市由のせざる 由家三市由  
は六つ子と一極とてさる一とぞ三市由ハお三市由  
お霜とさる一けは六お三市由の悦びいらん方もさ  
己三市由今ハ通るのち様お三市由茂平さんが知るまゝ  
思ひては所へ来るものぞけ後も由れをばさるる











合あるる金の證文を取返し以來お三村一茂平ふ  
 村一書分るき書付をとりて取しけきバ以春ハきより  
 住居をも戸部へ引移して清業善人榮之悪人の自業  
 裏へとぞお三茂平の實情ハいといとて毫度とぞおまん  
 背層を今様ふらふ一植る花名所懐中おとく年中ハ  
 合せ一数の十二冊目録及あふふ書納む

花名所懐中曆四編下之巻大尾 校合 狂詠舎春曉  
 爲永春水作

溪齋英泉画



太真遺傳  
 處女香

精製桐の挿入

花名所懐中曆四編下之巻大尾 校合 狂詠舎春曉  
 爲永春水作







